令和６年10月１日発行（毎月１日発行）

2024.10
（公社）富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

10号
第46巻
No.423

ツチアケビ *Galeola septentrionalis* Reichb.f.　（ラン科 *Orchidaceae*）

生　薬　ドツウソウ（土通草）　秋に赤く実った果実を採り、陽乾する。

成　分　不詳。

効　能　民間では野生のものを採取し、強壮、利尿に煎じて服用。薬用酒としても用いる。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター
村上守一氏　写真撮影

○○表紙について○○

ツチアケビ属の植物の多くは亜熱帯や熱帯に分布しますが、わが国のツチアケビだけは分布上特異な存在で、北海道など亜寒帯でも生育する植物です。種学名の*septentrionalis*は「北方の」を意味し、北に生息するただ一つの種であることを示しています。他に本州、四国、九州、沖縄などの深山の木陰に生える葉緑素を持たない菌従属栄養植物です。根茎はほぼ這い、太くて短く、直径１－２cm、卵形の鱗片をわずかにつけ、多くの太い長い根をひろげ、根の中にナラタケ（*Armillaria mellea*）の菌糸束を取り込み菌から栄養をもらいます。同じラン科植物のオニノヤガラ（*Gastrodia elata*）も塊茎部にナラタケ菌を採り込み、栄養をもらう菌従属栄養植物です。塊茎部は天麻といい、強壮薬として使われます。

ナラタケ菌は広く世界中に分布し、ミズナラ（*Quercus crispula*）・コナラ（*Q.serrata*）・クヌギ（*Q.actissi*）などのコナラ属植物だけではなく、ブナ（*Fagus crenata*）などの広葉樹やカラマツ（*Lariy kaempferi*）、アカマツ（*Plnus densiflora*）、ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）などの針葉樹林の切株、朽木、弱った樹木の地際、倒木などや、その周辺の地上、埋もれた木などに群生する木材腐朽菌で、枯れ木などを分解して養分を得ています。枯死植物や生木の寄生部分で生活する菌糸体はその部分だけで生活史を完了するのではなく、黒く木の根のような菌糸束を形成してこれを地中に伸ばし、離れたところに存在する枯れ木や生木に接触すると、これにも新たに菌糸を伸ばし寄生します。時には生きている樹木の根に寄生し、病原性があるために樹木を枯らしてしまうこともあります。初秋から晩秋にかけて出す子実体（キノコ）は各地で普通に見られ、食用にされます。

話をツチアケビに戻します。花茎は地下茎の節のようなところから直立し、赤褐色、肉質で硬く高さ30－100cm、上部は分枝します。６－７月頃、枝先に総状花序を出し多数の花を咲かせます、花は半開で径２cmほど、淡黄色。萼片は長さ約２cmの楕円状卵形、側花弁は萼片に似ていて、わずかに幅が狭く、無毛。唇弁はほぼ広卵形、黄色、萼片より短い。果実は血赤色、多肉質、長さ７－13cm、幅1.5－2.5cm、アケビ（*Akebia quinata*）の実に似て、土から生えるアケビで「ツチアケビ」と名付けられたと言われています。漢名はアケビの漢名「木通」の木を土に変えて「土通草」と和製漢字が付けられました。見た目はアケビというよりはウインナーソーセージと言ったところです。赤いトウガラシに似ているところからヤマトウガラシの名で呼ばれることがあります。他にヤマノカミノシャクジョウ、ヤマシャクジョウ、キツネノシャクジョウとも呼ばれ、果実が多数ぶら下がった様子が修験者の錫杖（しゃくじょう）に似ていることから名付けられたと考えられます。翼のある小さな種子が密に入ります。

類似植物に同じツチアケビ属のツルツチアケビ（*G.altissima*）があります。国内では九州の大隅半島、屋久島、種子島、南西諸島などの暖地に自生し、台湾、フィリピン、マレーシア、インドの亜熱帯にも分布する、つる性で樹幹によじ登るためタカツルランとも呼ばれています。ツチアケビと同じ菌従属栄養植物ですがナラタケ菌だけに頼らず他の多数の木材腐朽菌と共生できるところが異なっています。常緑樹林下に生育し、５－20mも樹幹に這いあがり、地上茎は赤褐色で、やや細く、長く伸びて葉は無く全株無毛。５－７月、茎頂に複総状花序をつけ、多数の花を咲かせます。花は淡黄色から淡黄褐色で径約３cm、半開し、花被片は線状長楕円形、長さ１－1.5cm、幅４－５mm。唇弁は先が浅く３裂し、基部は筒状に巻く舟形で、３列の長い板状突起と多数の糸状突起があり、内面には多数の横縞模様があります。果実は棍棒状で長さ10－15cm、赤熟します。

（村上守一　記）